

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Diary of Hisakatsu Hijikata (IV)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000910

註

【第19冊】

- 1) ショーガクボー＝正覚坊。アオウミガメ。体長約1メートル。甲羅は暗緑色で、海草を主食にする。
- 2) オイソウ＝集落のなかの、10あるブコス（区画）の一つ。マーサノエ氏の居住地。
- 3) ナムチュルク＝サタワルの西96キロメートルにある島。ナムチック、ラモトレク島のこと。
- 4) 昨日海ノ中カラ見タラ＝コノサフエヤヌ・メサヌビクについては、『サテワヌの神と社会』（『土方久功著作集』（以下、『著作集』と略す）第4巻）95～97頁に記されている。
- 5) Poupī = Ilipoūpī（イニポウビー）。久功がサタワル島に来島して5日目にもらった「オ嫁サン」。年齢は19～22歳。久功に言葉をはじめ、島のことについて教え、民話も多数提供した。
- 6) Leimalikaḡ＝月経小屋。月経小屋については、「サタワル島に於ける『穢れ屋』ニ就いて」（『著作集』第4巻所収）に記されている。
- 7) 朝早く覚メルト、風ハ止マズ＝この日の嵐の様子は、「サテワヌ島雑記」（『著作集』第6巻）255～257頁に記されている。
- 8) 大工サン＝杉浦佐助。『日記』Ⅱ，註221参照。
- 9) Oʻālebur＝サタワル島出身で、10年程前、アンガウル島の燐鉱採掘人夫としてパラオへ連れてこられたが、雇用の期間が終了しても島へ戻らず、そのままパラオに留まっていた。久功とは、パラオ本島の北にある、カヤンガル島で出会った。久功は、サタワルへ帰りたがっていたオジャレブルを通訳として、人夫としても役立つので、一緒につれてきた。
- 10) 今日ハ Ālūū ノ儀式ガアッタ＝このヤヌーの儀式については、『サテワヌの神話と社会』（『著作集』第4巻）92・93頁に記されている。
- 11) 長明＝長明丸。離島航路の100トンほどの小さなスクーター型の本造帆船。パラオから、ヤップ、ウルシー、フェイス、オレアイ、エラート、ナムチックなどの島々を経て、終着点、サタワルへ来る。年4回来島した。
- 12) Pigölö＝サタワル島から96キロメートル北西にある無人島のブケーノ島。約119,000平方メートルの小さな島。
- 13) 人々ガ Failē ニ集ッタ＝このヤニュー（呪者）の予言については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）101頁に記されている。
- 14) ソーク＝ソウク島。ブルスク島とも。チューク諸島の北西離島の一つで、エンダビー諸島の南にある島。
- 15) 此ノ Arangap＝Arangap（カツオ）の epil については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）251～255頁に記されている。
- 16) 明日 Po ガアル＝Po については、「サテワヌ島における航海術伝授」（『著作集』第4巻）に記されている。
- 17) rong＝呪文。Rong については、「サフエイとロン」（『サタワルの神と社会』（『著作集』第4巻））102・103頁に記されている。
- 18) Failē ノ yaliū, Ileiūpūmal ガ神託ヲ告ゲタ＝この神託については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）102頁に記されている。
- 19) 昨日, Ikomūr ガシタ Safei ハ＝このサフエイ（呪薬）については、「腫れ、痛みのサフエイ（Ilangi li meailap）」として、『サタワルの神と社会』（『著作集』第4巻）103・104頁に記されている。

- 20) tata lū (li) me abořikkar ト云フ safei ガアル=このサフェイについては、「腫れ、痛みのサフェイ」(『著作集』第4巻) 104 頁に記されている。
- 21) tata li fai =このサフェイについては、同上、104・105 頁に記されている。
- 22) 男(夫ナリ、情人ナリ)ガ他ノ女ヲ探シニ行ツタ場合=このイニメスという惚術については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 105 頁に記されている。
- 23) 妊娠ニツイテノ epil =妊娠時禁忌については、「サテワヌ島に於ける子の養育と性的秩序 妊娠、出産」(『サテワヌの神と社会』、『著作集』第4巻) 194 頁に記されている。
- 24) 兄弟姉妹(ブイブイ・モギャン)ノ呼称並ニ其レニ関スルエツピル=兄弟姉妹間の禁忌儀礼については、「女系社会に於ける「父」」(『サテワヌの神と社会』〈『著作集』第4巻〉) 181・182 頁に記されている。
- 25) マラカル=パラオのコロールの南西にある小さな島。
- 26) 離婚=離婚については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 160・161 頁に記されている。
- 27) 姦通=姦通については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 161 頁に記されている。
- 28) Losomar [(Faiel) ヲノゾキタル小 Losomar] (Karingeirek, Adirong) 氏財=ノーソマルの氏財については、『サトワルの神と社会』(『著作集』第4巻) 124～128 頁に記されている。
- 29) 相続方ノ实例=相続順位については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 121～123 頁に記されている。
- 30) 四晩ノ epil engang トナツタ=葬儀に伴う仕事の禁忌、タブー等については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 224 頁に記されている。
- 31) Ilemūrūma ガ気ガフレタ=Ilemūrūma と Pūlakkit の狂気については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 62・63 頁に記されている。
- 32) 学校子供ノ malor =この子供の病気については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 58 頁に記されている。
- 33) yaliū, Ileiūpūmal ガ明朝=この巫女 Ileiūpūmal の告げについては、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 63・64 頁に記されている。
- 34) saūsaū =この saūsaū については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 71～75 頁に記されている。
- 35) Ibūmāi ノ病気ノコト=Ibūmāi の病気については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 55～58 頁および 112～115 頁に記されている。
- 36) Poūpi モ以前ニ mmang ニナツタ=この Poūpi が狂気になったことは、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 64・65 頁に記されている。
- 37) yaliū nngaū — Leaitimal ガ出タ話=この悪神については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 69・70 頁に記されている。
- 38) 南貿=南洋貿易株式会社。『日記』Ⅱ，註 214 参照。
- 39) メナード=メナド (Menado)，インドネシア，スラウェシ島の町。『日記』Ⅱ，註 226 参照。

【第20冊】

- 40) Faiel ノ yaliū ガ云フニハ=この呪儀については、『サテワヌ島の神と社会』(『著作集』第4巻) 77～79 頁に記されている。
- 41) アンガウル=パラオ諸島南端にある隆起珊瑚礁の島。面積 8 km²。南洋庁の官営事業として磷鉍採掘が行われた。サタワル島からも人夫を出していた。

- 42) 岩崎＝サタワル島に住んでいたコプラ仲買人。黄永三という名の朝鮮人であったが、岩崎という名を使っていた。久功がサタワル島へ行く半年前、変死した（『流木』〈『著作集』第7巻〉20～22頁）。
- 43) 昨日ノ fū ū rī＝このフー・ジについては、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）90・91頁に記されている。
- 44) サトワヌ語ノ発音ニ就イテ＝サタワル語の発音、写音については「サテワヌ語の発音と写音」（『サテワヌ島民話』〈『著作集』第5巻〉）338～359頁に記されてる。
- 45) 太陽ト島ト海ト（宇宙）トニ就イテ＝宇宙については、「サテワヌ島民の自然観」（『著作集』第4巻）232～234頁に記されている。
- 46) 昔、星々ガ未ダ其位置ヲ得ズ＝星と風、天、雨、雷電については、「サテワヌ島民の自然観」（『著作集』第4巻）234・235頁に記されている。
- 47) 地震ノコト＝地震については、「サテワヌ島民の自然観」（『著作集』第4巻）235頁に記されている。
- 48) roango li yang＝この禁區に入つた祟りを除く safei については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）87頁に記されている。
- 49) 南洋庁＝『日記』Ⅱ，註210参照。
- 50) コノ epil 犯ニ対シテ Roū pai ガ行ハレタ＝この epil 犯に対する Roū pai については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）87頁に記されている。
- 51) Agilipoe ノ大声ノ rong ガ聞コエ＝このヤキニボエの行った呪儀については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）93・94頁に記されている。

【第21冊】

- 52) mār ヲ作ル前ニ行フ儀式＝この儀式については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）82・83頁に記されている。
- 53) 6月27日～30日の日記は、書き改められ、「森」と題し、『文化の果にて』（『著作集』第6巻）111～118頁に収載されている。
- 54) Eūiyang ノ女房 Liyār ト Lingāk トガ姦ヲ通ジタ＝この姦通については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）168・169頁に記されている。
- 55) Eūiyang ガ Sawek ノ女房 Leppalengāf ト姦ヲ通ジタ＝この姦通については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）169～171頁に記されている。
- 56) 今夜ハショボショボト＝一部改め、「黄色い月」と題し、『青蜥蜴の夢』（『著作集』第6巻）56～59頁、および「わが青春のとき」（『著作集』第6巻）229～232頁に収載。
- 57) 過般、奇抜ナ離婚、結婚ガアッタ＝この二組の夫婦の事件については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）167・168頁に記されている。
- 58) Yābūkū ト云五十位ノ男ガ椰子ノ木カラ落チタ＝この Yaliū pūng tiū の祓いについては、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）62頁に記されている。
- 59) 一種ノ色情狂ガ居タ＝この色情狂については、『サテワヌ島の神と社会』（『著作集』第4巻）67・68頁に記されている。
- 60) 例ニヨッテ Fitialimāi ガpoe ヲナス＝この占いについては、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）94・95頁に記されている。
- 61) 今日ハ亦姦通罪ガアッテ＝この姦通については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）168頁に記されている。
- 62) 朝、Aboik ノ Safei ガアッタ＝このアボウイーキのサフェイ（呪禱）については、『サテワヌ

の神と社会』（『著作集』第4巻）80頁に記されている。

- 63) 田山東北帝大講師＝田山利三郎（たやま・りさぶろう）。明治30年（1897）生まれ。珊瑚礁研究の大斗として知られていた。昭和13年、久功等がサタワル島を去り、パラオへ行く時、南洋拓殖会社の神州丸に便乗したが、田山氏も調査のため乗船しており、船中で久功は、パラオに留まるために南洋庁へ勤めたい旨話をした。その後間もなく、田山氏の紹介により、久功は南洋庁地方課・商工課の嘱託となることができた。昭和27年9月24日、竜神礁の調査をしていた時、乗船していた測量船第五海洋丸が海底火山の爆発にあい、調査員、乗組員とともに死去した（『僕のミクロネシア』（『著作集』第6巻）244頁）。
- 64) 染木煦画家＝染木煦（そめき・あつし）。明治33年（1900）生まれ。東京美術学校西洋画科卒業。ミクロネシアの島々をくまなく回り、民具を集め、保谷にあった民族博物館に収蔵した。『ミクロネシアの風土と民具』（昭和20年2月刊）等の著書がある（同前、242・243頁）。

【第22冊】

- 65) 私達ハ「サンバシ」ニ涼ミニ行キマシタ＝一部改め、「カヤンガル島のゆうべ」と題し、『青蜥蜴ノ夢』（『著作集』第6巻）40・41頁に収載。
- 66) 私ハ海カラノカヘリ＝一部改め、「プキタン」と題し、『青蜥蜴ノ夢』（『著作集』第6巻）37～40頁に収載。
- 67) ヤヤ暑キ＝この詩は、『土方久功日記』Ⅱ、第10冊、1926年7月17日の条（154頁）に収載されている。
- 68) 一ツコト＝この詩は、同、1926年7月16日の条（153頁）に収載されている。
- 69) ツネサン＝久功が7、8歳の頃、渋谷の叔父の家に厄介になっていた20歳位の青年。『土方久功日記』Ⅰ、註136参照。
- 70) 私ノ連レハ「ディラゲルール」ト＝一部書き改め、「青蜥蜴の夢」と題し、『青蜥蜴の夢——お砂糖のように甘い南島の……』（『著作集』第6巻）2～13頁に収載。なお、オバックルビールとディランゲルールについては、『日記』Ⅲ、註23参照。
- 71) 昨日書イタ Failē ノ Yaliū ノ Safei ノーツハ＝前日の Yaliū の Safei（占）については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）98～100頁に記されている。
- 72) 昨夜半、南ノ小兒 Pūkkailiūk 死去＝このレイソーソップ reisōtūp（近親靈魂神）については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）60・61頁に記されている。
- 73) 云ハバ墓占トデモ云ハルベキ迷信＝この墓占については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）227・228頁に記されている。
- 74) ソレカラ死人ガアルト、近親者ハ Lūgūlūgū ト云フコトヲスル＝この lūgūlūgū（個人的な喪）については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）225頁に記されている。
- 75) 死人ニ就イテ今一ツ＝死に方に就いては、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）228頁に記されている。
- 76) 昨日、夕方 Leama ニ Yaliū（maliyaff）来テ fiŋo ラナス＝このヤニューの予言については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）101・102頁に記されている。
- 77) 昼過ぎ Būroŋik ノ幼児♀ Learūlik 死去＝この幼児の死については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）65・66頁に記されている。
- 78) 昨日ハ亡兒ノ処デハ夜中泣キ明カス処ヲ＝この引きつけとサフェイ（呪薬）については、『サテワヌの神と社会』（『著作集』第4巻）66・67頁に記されている。
- 79) 私ハ遅ク他処カラ帰ッテ来タ＝一部書き改め、「月夜」と題し、『青蜥蜴ノ夢』（『著作集』第6巻）32～36頁に収載。

- 80) 先ヅ我々人間 (aramasū 生者) ハ靈魂ト肉体カラ成ッテ居ル=靈魂觀については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 225～227 頁に記されている。
- 81) 次ニ Ngōliūsā ハ何処ニ行クカ=この死霊と天国との関係について(～14 日)は、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 51～55 頁に記されている。
- 82) Abōik ラ主トスル Katō meai ノ儀アリ=このカトー・メアイ(パンノキの実の豊穡儀礼)については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 79 頁に記されている。

【第23冊】

- 83) Lūka li mār ノ儀アリ=ヌーカニ・マルの儀式(パンの実の蓄えたものがうまくなるようにとの呪禱)については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 81 頁に記されている。
- 84) アメーバ=アメーバ赤痢。赤痢アメーバによる消化器伝染病。世界各地でみられ、特に熱帯、亜熱帯での発生が多い。
- 85) 昨日ノ Litūūng 達ノ結婚=この結婚については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 97・98 頁に記されている。
- 86) 今日ハ ilao ト云フコトアリ= ilao (イナオ) については、「サタワル島に於ける漁法」(『著作集』第4巻) 247・248 頁に記されている。
- 87) 羽根田氏=羽根田弥太。パラオ熱帯生物研究所員、発光生物学研究者。戦後、横須賀市博物館初代館長となる。
- 88) サウファノ件(黄変死)=コブラ仲買人の黄永三殺人事件。サウファ(Saūfa)は、黄を殺した犯人で、後パラオで起訴され、処刑された。
- 89) 南洋拓殖=南洋拓殖株式会社。1936年11月、南洋庁によりパラオに設立された南進政策のための国策会社。ボーキサイトと燐鉱石の採掘、アルミニウム工場から、海運、ホテル、発電、冷蔵、農漁業などの事業を多くの島で展開した(須藤健一氏「土方久功が住んだパラオ」, <『土方久功日記』Ⅲ所収> 614 頁)。

【第24冊】

- 90) 島嶼生成ニ就イテハ矢張り Likaūpūūp 説デアリ=ボロワットの神については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 50・51 頁に記されている。
- 91) 僅カニ一妻多夫婚ノ異例ガアリ=一妻多夫婚については、『サタワルの神と社会』(『著作集』第4巻) 171・172 頁に記されている。
- 92) 次ニ=このサクエの婚姻については、「特殊例」として、『サタワルの神と社会』(『著作集』第4巻) 172～174 頁に記されている。
- 93) Kaūfūrū 附記=婚姻による近親関係については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 162～164 頁に記されている。
- 94) fi raorao ト云フコトガアル=このフィラオラオについては、「サタワル島に於ける葬儀」(『著作集』第4巻) 227 頁に記されている。
- 95) 死人ガアルト=死人の頭髮の扱いについては、「サタワル島に於ける葬儀」(『著作集』第4巻) 220・221 頁に記されている。
- 96) 先ヅ Rongo li yang ハ=ロゴニ・ヤンについては、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 85・86 頁に記されている。
- 97) meai li mmas ノ神ハ=メアイ・ニ・ムマスの神については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 82 頁に記されている。
- 98) 此ノ Laifailiūk ノ死=このナイファイニユクの死については、『サテワヌの神と社会』(『著作

集』第4巻) 59・60 頁に記されている。

- 99) Būrouřik = Saūsaū アリ = このサウサウ (悪霊祓い) については、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 75～77 頁に記されている。
- 100) Yaliū ガ来ルト云フノデ、皆 Failēl ニ集ッタ = この一件については、「ヤニューの失敗」と題し、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 100 頁に記されている。
- 101) Ilipoūpī ト Tūgūpaie ト結婚シタノハ六月ノ始メダッタ = この二人の結婚・離婚については、「離婚の特殊例」として『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) 174・175 頁に記されている。
- 102) Ngelūūl = ディランゲルル。昭和4年(1929)、久功がパラオのコロールに住んでいたとき、隣家に従姉妹のオバックルビールとともに居た娘。散文詩「青蜥蜴の夢」(詩集『青蜥蜴の夢』所収) に三人でガルミツ部落へ行ったときのことが書かれている。当時、10 歳くらいであったが、この時は成人し、結婚していた
- 103) 「サトワル島ニ於ケル□母系氏族制度・社会」ト云フ題デ二時間程話シ = この講演の速記録は、「サトワル島々民の慣習」の前半部(『サテワヌの神と社会』〈『著作集』第4巻〉に収載) となっている。
- 104) 「禁忌ニ埋モレ果テタ現存未開人ノ生活」ト云フ題デ二時間程話シ = この講演の速記録は、「サトワル島々民の慣習」の後半部(『サテワヌの神と社会』〈『著作集』第4巻〉に収載) となっている。
- 105) 講演「Satowal 島ノ神, Yaliū ノ輪郭」 = この講演の速記録は、「〔総説〕ヤップ離島サテワヌ島の神『ヤニュー』」と題され、『サテワヌの神と社会』(『著作集』第4巻) に収載されている。
- 106) 今日ハ Ngelūūl 達ト「ガルミツ」ニ遊ビニ行ク = この日のガルミツ行きのことは、書き改め、散文詩「ガルミツ行」(詩集『青蜥蜴の夢』〈『著作集』第6巻〉所収) となっている。